

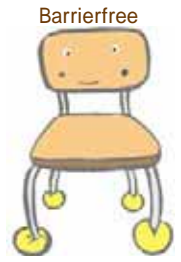


## テニスボールでバリアフリー



教室の椅子や机にテニスボールがはめられていますよ

こたえ  
教室の椅子が  
ボールをはいてたのは  
静かな教室にするため。  
学校でみつけた  
バリアフリーです。



### 小郡校区の学校では

当たり前だったのに…

小郡校区の小中学校を卒業した難聴者のAさんには、テニスボールを脚につけた椅子は当たり前前の教室の光景でした。

補聴器をつけている難聴者にとって、椅子を動かすたびに教室でひびく音は、補聴器で拾われ音が増幅します。そのため聞きたい声や音が聞こえない、耳が痛いなどの弊害があります。椅子の脚にテニスボールをつけることで、音のひびきが押さえられ静かな環境になります。

十数年前に小郡校区の難聴児を持つ保護者たちが、このテニスボールの試みを難聴児の保護者会で知り、学校で試してほしいと小中学校に申し入れたのが小郡での始まりです。

難聴児のいるクラスを皮切りに「静かな環境は勉強をするすべての子どもたちに大切なこと」という考えのもとにこの試みは全クラスへ、さらに他の小中学校へと広がっていきました。



### バリアフリー Barrier free

障がい者を含む高齢者などのいわゆる社会生活弱者が社会生活に参加する上で生活の支障となる物理的な障がいや精神的な障がいを取り除くための施策、もしくは具体的に障がいを取り除いた状態のことです。



### 耳マーク

このマークは難聴者の方に対して「お気軽にお尋ねください。手話や筆談で対応します」という表示です。  
また、耳の不自由な人である事を表すマークでもあります。

学校の対応はとても協力的で、当時の保護者は「先生方の後押しが嬉しかったですね。障がいのある無しに関わらず、一人ひとりの子どもたちのためという気持ちが本当に感じられました」と話していました。  
Aさんは高校へと進学しました。それでも「テニスボールをつけてほしい」と申し込み、許可されましたが、「あなたがクラス分のボールを準備するなら構いません」という条件つきでした。しかも当事者のいるクラスだけという対応だったのです。多感な十代のAさんにとっては「このクラスだけ特別な人がいるよ」と言われているようで、いごこちのよいものではありませんでした。当事者の思いを理解してもらうことの難しさを感じました。  
現在小郡市内の多くの小・中学校では、テニスボールが机や椅子につけられています。個人の不自由さが決して「ひとりの問題」だけに終わらず、みんなのこととして広がっていったのですね。  
Aさんは今、福祉関係の大学生となり、サークルで手話や耳マークを広める活動をしています。